

ing の初期の段階ではその表現は少なく、やがて不快な情緒表現が多くなり、以後会の進行とともに不快な情緒が減少し、行動の改善も見られるが、今回は期間が短いためいろいろ問題がある。

矯正施設における治療システムについて

久山照息・○森戸俊夫(中野刑務所)

集団心理療法に現われた収容者の性格特性や刑務所場面の認知構造からみて、われわれは矯正施設での心理療法の立場からみた治療条件として次の3点を提起する。

1) 自己の問題が自己の内部の動機および認知の pattern と関係しているという自覚がなければならない。

2) そういう問題が許容性に支えられた治療者と収容者との人間関係が与えられなければならない。

3) 新しい行動の pattern を学習し、テストし固定化するための機会が与えられなければならない。

以上の3つの条件を満足させるためには組織的治療システムの上になつた活動が必要とされ、集団心理療法がこうした意味からこのシステムの中で重要な位置をしめて来ることが考えられる。

討論の概要

討議の中心は非行少年および犯罪者のカウンセリングの問題で占められ、ことに田中正吾より集団と個人の両者併用が望ましいがどうかという宮本への質問を契機として、カウンセリングの方法論として最も重要な問題のひとつである「個人」か「集団」かの討議が活潑になされた。宮本は個人カウンセリングを併用していると答え、久山は矯正施設の特長な構造からはグループ中心の重要なことを強調した。この点について、酒井(京都医療少年院)はクライアントが自己の非行にたいする働きかけが個人カウンセリングに比較して、グループカウンセリングでは稀薄になるのではないかと疑問を出した。

再犯予測、非行傾向予測の問題もこの部会で討議のひとつの焦点であつたが、報告されたものはまだ中間報告的な段階であつて将来の発展が期待された。山本のグループ方式の再犯因子の数量化にたいしては、数量化したいの問題、さらに予測という発想に対する疑義、中西昇から両親の愛情関係の数量化に対する問題および子どもに対するどういふ愛情関係がいいのか一義的に規定されるかといった根本的問題が討議された。しかし、実際の指導および精神衛生のためには信用しうる予測因子、尺度の望まれることも来会者のひとしく認めるところであつた。

(久山照息)

グループ・ダイナミックス I

幼児の遊び活動

細谷啓子(お茶の水女子大)

遊びの志向行動について対物(-O)と対人(-P₀)的側面との互に干渉しあう dyadic model を考え、この点に立つ5分類形式によつて3種の遊具の観察事例を検討する(一部23回応心発表)。

遊具(回) 形式	すべり台① 217	ぶらんこ② 213	人形③ 570
I) P-O	昇降・身振 88	乗降・身振 79	取得・放棄 弄び 307
II) P-O-P ₀	模倣・協応 10	左に同じ、 争奪 15	傍観・妨害 奪合い 59
III) P-P ₀ -O	誘い・ごつ こ 24	行列・誘い 譲占 40	弄び・誘い せん望 136
IV) P-P ₀	話合い・威 赫・ごっこ 43	話合い・注 告・助け 51	ごっこ・話 合い・追跡 46
V) P-	傍観・彷徨 中断 52	左に同じ 38	身づくろい 静止・彷徨 21

上表の類別交渉関係の最頻行動とその回数によれば形式についてはI)に遊びの主題がみられた。別に遊び群化傾向によれば②>①>③で、形式の転換に内容的違いがあつた。as if 行動・傍観、彷徨等幼児の一般的特徴行動は各形式のどこかに属して現われているが、これらは遊具のもつ特性によると考えられ、各遊具によつて特異性があつた。すなわち対人対物関係の緊密性について、①ではその ground 的性質が、②はP₀に対する閉鎖性、そして③はP-Oの一体化が強いと思われる。なおV形式は行動の転換をきたす中間段階としての意味があつた。

学級意識の発達に関する研究(その1)

—1. 問題の提起—

沢田慶輔・肥田野直(東京大)

高桑康雄(国学院大)

○竹下由紀子(学生問題研)

1) 学級意識尺度作成の目的

学級意識を、ここでは学級集団のメンバーである児童の自分の属する学級についての概念と、学級集団内での自分というものについての概念として考えた。このような概念は学級での生活経験によつて形成されるとともに、他方児童の学級集団内での社会的行動を規定すると考えることができる。